

28.10.5 (水)
0950~1040
空軍大学セミナー基調講演

エア・パワーの有用性について

防衛省防衛研究所
戦史研究センター
国際紛争史研究室長
石津朋之

はじめに

- ・航空機動力初飛行から僅か1世紀余り
- ・「1900年代初頭から1920年代にかけて実験的かつ陸軍力の補助的軍種に過ぎなかった空軍は、1920年代から1940年代にかけて有用かつ重要な軍種へと発展を遂げた。それが、1940年代から1990年代にかけて絶対に必要不可欠な軍種となり、そして、1990年代以降は、あたかも単独で戦争に勝利できる軍種へと発展したかのようである」(コリン・グレイ：下線は石津)。
- ・宇宙空間が秘めた可能性——エアロ=スペース・パワーへ cf. スペース・パワーはエア・パワーの延長？

1. エア・パワーの発展

- ・エア・パワーが有する7つの利点(グレイ)——①遍在性(ubiquity)、②頭上空間という翼側(the overhead flank)、③行動距離及び到達能力(range and reach)、④移動速度(speed of passage)、⑤地理的制限のない行動ルート(geographically unrestricted routing)、⑥卓越した偵察能力(superior observation)、⑦集中の柔軟性(flexibility in concentration)

2. 最初の転換点としての第二次世界大戦(1939~45年)

- ・①ドイツ陸軍による「電撃戦」、②日本海軍による真珠湾奇襲攻撃、③連合軍(空軍及び陸軍航空部隊)による戦略爆撃、④アメリカ陸軍航空部隊による原爆投下など→戦争のあらゆる次元において必要不可欠な要素へ、伝統的軍種を跨いだエア・パワーの有用性
- ・「エア・パワーは第二次世界大戦においてその有用性が確固として証明された。しかしながら、それはドゥーエの言う意味のエア・パワーではなく、むしろミッチェルがイメージしたエア・パワー構想、すなわち、飛ぶものは全て兵器になり得るとの発想であった」

(バーナード・プロディ)。

3. 2人の開拓者——ジウリオ・ドゥーエとウィリアム・ミッチェル

- ・第一次世界大戦の塹壕戦及び消耗戦争を超えて——戦間期のヴィジョナリーたち（リデルハート、フラー、トレンチャード、ド・ゴール、グデーリアン、マンシュタイン、トハチェフスキー、セヴァースキー、山本五十六）
- ・ドゥーエの発想——①「制空権」、②戦略爆撃及び爆撃機至上主義、③空軍至上主義 cf. ハリスとルメイ
- ・ミッチェルの発想——①独立空軍、空軍が有する兵器は全て有用、③軍種の統合的な運用を模索

4. 第2の転換点としての湾岸戦争（1991年）——「最初の宇宙戦争」？

- ・ジョン・ワーデン——情報技術の発展の成果を活用して通常兵器によって戦略目的を達成する方法をアメリカ空軍内に復活 cf. ジョン・ボイドと「OODA ループ」
- ・エア・パワー理論の再生——ワーデン “how to act”：ボイド “how to think” cf. ジョミニとクラウゼヴィッツ
- ・戦闘空間（戦域）の規定と「占有力」の概念の変化？
- ・ドゥーエの夢が実現？

5. エア・パワーと「時代精神」

- ・エア・パワーと「ポストヒロイック・ウォー」（エドワード・ルトワック）
- ・エア・パワーと「ルーティーン・プレシジョン」の時代（ルトワック）
- ・軍事的破壊及び消耗戦争から「システム麻痺（systemic paralysis）」と「戦略的効果（strategic effects）」へ——マヌーヴァリストの夢が実現？
- ・宇宙空間からの戦い——統合運用のためのプラットフォームとしての究極の「ハイ・グラウンド」
- ・宇宙空間での戦い

6. エア・パワーが抱えた問題

- ・エア・パワーの有用性——国家戦略という枠組みの中で評価されるべき
- ・「模倣（対称性の確保）」と「非対称戦争」
- ・軍種及び兵科の「相乗効果」
- ・①時間的・空間的な「占有力」の断続性、②基地依存性、③限られたペイロード、④壊れ易さ、⑤費用、⑥天候への脆弱性、など
- ・エア・パワーの有用性をめぐるパラドクス
- ・「エア・パワー＝エア・フォース（空軍）」？

- ・統合化及びネットワーク化された軍事力の重要性

7. エア・パワーの将来

- ・軍事力行使と 21 世紀の「時代精神」の相克
- ・「^{ジュネコール}青年学派」から学ぶ

おわりに

- ・軍事力の統合化及びネットワーク化——①絶え間ない組織の再編成、②「統合文化」の構築
- ・日本のドゥーエ、あるいはジョン・アンドレアス・オルセンを求めて——「普遍性」と「土着性」

以 上